

# 十九世紀から二十世紀初頭におけるロシアの中央アジア探険隊

イリーナ・F・ポポワ

※シンポジウムの発表は英語で行われた。本稿は、その原稿を邦訳したもの。原文の「Central Asia」を「中央アジア」、Middle Asiaを「中部アジア」と訳した。「中部アジア」は、トルクメニスタン、タジキスタン、ウズベキスタン、キルギスタン、カザフスタンの五カ国が位置する地域を指していると考えられる。

広大な中央アジアの地域には、多くの遊牧民や定住民が暮らしています。彼らは異なった言語を話し、仏教、イスラーム、東方キリスト教を融合させた文化的

特徴をもっています。ロシアでは、十九世紀初期から、この地域が体系的な研究の対象とされてきました。

## 中央アジアのロシア人

ロシア人がカラコルムにいたことを示す最初の証拠資料は、十三世紀まで遡ります。この頃、モンゴルを經由して中国に連れてこられたロシア人捕虜たちが、元王朝（一二七一一―一三六八年）の宮廷でロシア人守備連隊に従軍していました。十六世紀には、ロシアのイワン雷帝が一五六七年にコサツク的首領（アタマン）だっ

たイワン・ペトロフとブルナシユ・ヤミシエフを中国に派遣し、彼らを通じてカシユガルに関する情報を受け取っています。十七世紀初期、ワシリー・チュメネツ（二六一五年）、イワン・ペトリン（二六一八年）、ヒョードル・バイコフ（二六五四年）らの率いる外交使節団が、西モンゴルを経由して中国へ行きました。一七一三年には、トボリスクの商人F・トルシユニコフが、ココノール湖（中国の青海）と黄河の上流域に到達。十八世紀には、フィリップ・S・イエフレモフ（一七五〇—一八一一年）<sup>1</sup>がカシユガルを訪れ、東トルキスタンと中部アジアの回想録を、カシユガルとヤルカンドの町の住民と商業に関する情報とともに記しています。

### 十九世紀前半から半ば…先駆者たち

#### 中国学者ビチューリン

ロシアにおける中央・中部アジアの学術研究は、傑出した中国学者ニキータ・Y・ビチューリン（一七七七—一八五三年、ヤキンフ神父とも）がその道を開きました。中国滞在中に豊富な資料を収集したビチューリンは、

中国本土について紹介する前に、まず中国と国境を接する諸地域のことを、ロシア国民に知らせることに決めました。彼はこう述べています。

チベット、トルキスタン、モンゴルについてまず取り組むのが筋であろう。というのも、これらの国や地域は長きにわたって中国と接触を保ち、中国がインド、中部アジア、ロシアへ接近できるようにしてきたからである。今述べた国や地域の地理的な位置と政治構造を概観することから始め、その後でそれらに対する中国の政治的見解を描写するのが適切であると思う。そのため、中国についての説明は、宮廷と政治、行政と立法、人々の習慣と伝統に関する考えを、前書きとしていくつか述べることにした。これにより、中国を適切に取り扱おうとする際、その政治的ねじれも全て含めて、中華帝国の全体像を提供することがより容易になるだろう。<sup>1</sup>

ビチューリンの歴史地理に関する著作物が、彼の著作物、出版物あるいはアーカイブに保管されたものの中で、最もすぐれていることは間違いありません。きわめて正確な翻訳と地理データによって位置が特定されたおかげで、彼の著作物は今日でも有効であり、古代・中世アジアの考古学、歴史学、民族学の価値ある資料として役立っています。一八二八年、ビチューリンは、十八世紀の漢文資料『衛藏圖識』の注釈つきの訳を基に、『現状におけるチベットの記述』を上梓しました。これは、ロシア語で出版された最初のチベット関連書籍となり、ロシア内外で高く評価されました。数々の定期刊行物にその書評が掲載され、学術的に非常に価値があるとされました。一八二九年には、ハインリヒ・ユリウス・クラブロート（一七八三—一八三五年）によるフランス語の注釈つきの訳書が、世に知られることになりました。

ビチューリンは一八二八年、漢文資料を基に、モンゴルに関する総合的な説明書である『モンゴル誌』を出版しました。この書籍もまた、ほどなくフランス語

に翻訳されました。一八二八年十二月十七（二十九）日にビチューリンが帝国科学アカデミーの通信会員に選出された大きな理由は、チベットとモンゴルを扱ったこれらの出版物にありました。その次の『古代と現代のジュンガリアと東トルキスタンの記録』（一八二九年）は、「ビチューリンすなわち」ヤキンプ神父の第三の主要業績となります。それには、最も著名な三つの漢文資料、すなわち『前漢書』巻九十六の「西域伝」、一七七七年に出版された『西域見聞録』、十八世紀中国公認の地理書『大清一統志』からの抜粋が翻訳・収録されています。残念なことに、この東トルキスタンに関する著作は、先の二冊の著作ほど注目されることはありませんでした。『古代と現代のジュンガリアと東トルキスタンの記録』の真価が認知されたのは、かなり後になってからです。それまでは、同時代のものとしては、N・A・ポレヴォイが書評を発表したぐらいでした。<sup>(2)</sup>

一八四八年、科学アカデミーは、中央アジアの民族史の編纂をビチューリンに任せます。それに応えて、彼は『古代中央アジアに暮らす諸国民に関する資料集

成』という全三巻の研究書を書きあげ、一八五一年にその第一巻が出版されました。<sup>3)</sup> 研究書は、これまで西洋諸国の人々に知られていなかった漢文資料の翻訳を基にしています。そこには、「西域伝」の巻、司馬遷『史

記』の中国近隣諸国に関する抄録、そして後漢(二五―二二〇年)、晋(二六五―四二〇年)、北魏(三八六―五三四年)、南北朝、隋(五八一―六一七年)、唐(六一八―九〇七年)の正史(『後漢書』『晋書』『魏書』『北史』『南史』『隋書』『唐書』)といった史料の編訳が含まれています。

ロシアが強大なユーラシア国家として国際舞台に躍り出ると、ビチューリンの著作も世に知られていきました。極東と太平洋に足場を固めたロシアは、内陸アジアの地政学上の真の重要性と、その包括的調査の必要性に気づきます。一八四五年八月六(十八)日には、勅令によって帝立ロシア地理学協会(IRGS)が創設されました。その「第一の任務」は、ロシアに関する確かな情報を集め、広めることであり、「第二の最も重要な任務は、諸外国、主にトルコ、ペルシャ、中国などの、ロシアと国境を接する国々を研究すること」<sup>4)</sup>で

した。さらに一八四六年には、スラブ・ロシア、古代ビザンツ帝国、西欧及び東洋の考古学部門からなる、ロシア考古学協会が設立されました。

#### 地勢図と地図製作

ロシアの幅広い層の読者が、アジアの未知なる世界に強い関心を寄せるようになりました。アジアを探険し、その地形を地図化する必要があると、多くの人々が感じていました。一八四八年、宮廷顧問P・V・ゴルブコフは、カール・リッターの代表作である『地理学』(Die Erdkunde)を、アジアの地図と補足をつけて出版できるよう、地理学協会に二千三百五十ルーブルを寄付しました。実のところ、十九世紀初期における中央アジアの地勢図製作は、カール・リッターとアレクサンデル・フォン・フンボルトの調査に基づいていました。しかし、彼らの理論的根拠はフィールドワークに拠っておらず、数多くの欠陥——たとえば、山脈や高原の広がりが増張され、山系の位置が不正確だった点——がありました。それにもかかわらず、著名な地理学者

のP・P・セミヨーノフルチャンシヤンスキー（一八二七—一九一四年）の編集と補足により、このカール・リッターによる著作のロシア語版が、一八五六年から一八七九年の間に五巻本として準備され出版されたのです。それは、ロシアにおける中央アジアの歴史地理学と地図製作の発展に弾みをつけました。

アジアの包括的な地図の製作は、一八五〇年にはじめて試みられました。その年の後半、Y・V・ハヌイコフとA・P・ボロトフが、中部アジアの北西部の地図を出版しました。ハヌイコフは、一八五一年に、イッシク・クル地域の地図を完成させます。一八五六年から五七年には、セミヨーノフが、天山山脈の頂上をヨーロッパ人ではじめて征服します。彼の探険は、内陸アジアの地理構造の概念を根本から変えました。セミヨーノフは、一八七三年から一九一四年までずっと地理学協会を主導し、困難かつ生産的であった多くの探険に着手してきました。それらの探険の第一の成果は、地理学的目標だけでなく民族学的・歴史学的目標も追求すべきであることを明らかにした点でした。

## 歴史地理研究へ

歴史地理学の問題は、その時代の多くの学者がもつ、現下の関心事でした。大学では、地理発見史や歴史地名学のコースが提供されました。中国と中央アジアの歴史地理の研究には、中国学者ワシリー・P・ワシリーエフ（一八一八—一九〇〇年）が実質的な貢献を果たしてきました。出版された彼の著作の四分の一は、地理を扱っています。<sup>(5)</sup> ワシリーエフは、中部アジアの河川が、古代に、シル・ダリアとつながり、支流となっていたことを最初に推定した人物です。<sup>(6)</sup> 残念ながら、彼の論文の多くは、未刊のままでした。たとえば「十世紀から十二世紀における中部アジア東部の歴史の概要」<sup>(7)</sup>（二十三頁、一八五七年）、「東（中国領）トルキスタンにおける居住地域の記録」<sup>(8)</sup>（二十五頁）、「クルジャ（旅行記より）」<sup>(9)</sup>（二頁）などがそうです。

一八四五年、ワシリーエフは、玄奘による『大唐西域記』の翻訳を完遂しましたが、残念なことに、それは世に出ることはありませんでした。本文は、ロシア

科学アカデミー文書館サンクトペテルブルク支部の、ワシリーエフ・ファイイルに保管されています。それは、注釈と地図のついた合計三三四フォリオからなる、十二冊のノートに収められています。<sup>(8)</sup> その後の中央アジアについての研究は、ロシア語で書かれた研究書も含め、フランス人中国学者スタニスラス・ジュリアン（一七九九―一八七三年）が一八五一年に出版した、玄奘による同書のフランス語版に依拠することになります。

高名なインド学者であるイワン・P・ミナーエフ（一八四〇―一八九〇年）は、ロシアとインドの間に横たわる諸国・諸地域の地理に関する書物を上梓しました。<sup>(9)</sup> また彼は、一八八〇年代に、マルコ・ポーロの『東方見聞録』を学術的な観点でロシア語に翻訳しました。彼の翻訳は、V・V・バルトリドによって改訂され、<sup>(10)</sup> 「ミナーエフの」死後に出版されました。

カザフの学者・教育者であり、中央アジアと中国の探険に何度も参加したチヨカン・C・ワリハノフ（一八三五―一八六五年）の調査は、ロシアの東洋学に大きく寄与することになります。彼は、一八五六年に、中国

西部とクルジャへ旅行しました。一八五八年十月から一八五九年三月には、ムスリム商人に変装して天山山脈を越え、カシユガルに滞在しました。彼はそこで、豊富な歴史学的・貨幣学的資料を収集する一方で、古代の仏教遺跡について記録します。彼は、旅行の成果を基に、詳細な論考二本——「中華帝国の西域について」と「クルジャとチユグチャクにおける交易について」——を書きました。それらは、一九六二年まで出版されることはありませんでした。<sup>(11)</sup> ワリハノフもまた、探訪した諸国や諸地域の歴史と宗教に興味をもっていました。彼は、クチャ付近一帯を描写して、こう指摘しています。「これらの山々には多くの洞窟があり、夏の間はそこから灯が見える。ある洞窟には、仏教徒の信仰対象物が彫られている。それらは唐王朝まで遡る」<sup>(12)</sup>

十九世紀後半、ピチュエリンをはじめ、アレクサンドル・フォン・フンボルト、J・P・アベル・レミューザ、スタニスラス・ジュリアンの著作が刺激となつて、中央アジアの歴史学、歴史地理学、民族学を包括するような概説書が多く生み出されました。ワシリー・V・

グレゴリエフ（一八二一—一八八二年）の歴史概論『東（中国領）トルキスタン』が、カール・リッターの『地理学』の補足として、一八六九年と一八七三年に二巻本で出版されます。<sup>(13)</sup>それはヨーロッパの学者の研究を基礎として、古遺物やアラブとベルシヤの資料も援用しています。一方、エミール・V・ブレットシュナイダー（一八三三—一九〇一年）<sup>(14)</sup>は、一八七六年と一八八八年に歴史地理に関する書物を出版しています。

### 十九世紀半ばから後半…本格的調査へ

軍事的・政治的関心の高まり

中央アジアは、ロシアの軍事的・政治的関心の的となり、重要視されてきました。十九世紀中頃から、広大なユーラシア地域は、ロシアとイギリスの二大帝国が、新たな市場と原料資源の支配権獲得をめぐる競争を競い合うこととなりました。中国やアフガニスタンも、当時両者の境界が明確に線引きされていなかったため、この「グレート・ゲーム」の当事者でした。これらの列強は、勢力範囲を分けることで、慣習的な地理的境

界や範囲もしくは国境を画定する問題を、地政学レベルで解決しようとしていました。地理的な要因が、最も重要とされました。というのも、予想される境界は、その地の自然の特有の外形がものを言いつて決定されることが明白だったからです。

そのため、ロシア政府と参謀本部は、モンゴル、中国、中東地域で踏査を実施するために、十九世紀半ばから、定期的に探検隊を送り出してきました。探検隊の踏査はロシアのアジア地域政策に沿って実施されただけでなく、踏査の結果が政策を部分的に左右することにもなりました。

アレクセイ・N・クロバトキン（一八四八—一九二五年）<sup>(15)</sup>が主導した一八七七年の派遣は、そのような（ロシアの政策）プログラムの一環でした。中国と、ロシア帝国に加わったばかりのフェルガーナやセミレチエンスク地方との間で国境が確立されつつあった一八八三年、中国とロシアの政府代表が三年ごとに国境を調査し、境界の目印を更新することが決まりました。一八八五年に、そのための第一回調査を任された、プロニスラウ・

L・グラブチエウスキ中尉（一八五五―一九〇五年）が、詳細な報告をまとめています。<sup>(16)</sup>彼の差し迫った任務は、カシユガリアにおける軍隊と軍事要塞の情報を提供することでしたが、その地方の道路の詳細な調査記録と地図もいくつか提出しています。これらの探険で提供された地図製作の資料や記録は、後年、多くの旅行家が依拠するようになり、その内容が非常に正確であると知られていきました。

一八六七年に西トルキスタンを併合したロシアは、英領インドの国境付近に接近しました。大英帝国は、中央アジアにおけるロシアの勢力拡大を阻止しようと、一八六九年、影響範囲を分割し両国の所有地の間に緩衝地帯を設けるという案をもって、ロシアと交渉を開始したい意向を明らかにしました。一八七二―七三年の英露間協定では、両帝国による影響範囲の分割ラインとして、アフガニスタンの国境が明確にされました。しかしながら、ロシアは一八七六年にコーカンドを併合し、東バミールに足場を作り始めます。一方、アフガニスタンのアブドゥッラフマーン・ハーン国王が、

バダフシャーンに隣接する多くの領土を一八八三年に引き継ぎます。それは、大英帝国の利権に見合った領有でした。それ以降、両帝国は、将来の交渉基盤を確実にしようと、それぞれの前哨基地を前進させつつ、係争中の領土の踏査に躍起になって乗り出していきます。<sup>(17)</sup>

地域の地形学的調査や地図製作のための調査を組織的に実施するにあたり、ロシア帝国の参謀本部は、その目的を軍事情報だけに限定しませんでした。調査担当者には、古い寺院や要塞の遺跡も地図化するよう命じています。参謀総長であったニコライ・N・オブルチェフ（一八三〇―一九〇四年）は、参謀本部科学軍事委員会の創設を主導しました。その結果、『アジアに関する地理学的・地形学的・統計学的資料集成』が出版され、第一次世界大戦が勃発する前に八十七巻が公刊されました。

#### ブルジェワリスキーの「叙事詩的」探険

ニコライ・M・ブルジェワリスキー（一八三九―一八

八八年)は、一八六七―一八六九年に、「極東の」ウスリースク地域へ一回目の旅行を行いました。著名な旅行家だった彼は、一八七〇年から一八八〇年までに中央アジアへの探険を四度敢行しましたが、その距離は合計三万キロにも及びました。彼は一八七〇―一八七三年にモンゴル、中国、チベットへ、その後一八七六―一八七七年にジュンガリア、ロプノール湖へ赴きました。また一八七九―一八八〇年には第一次チベット探険隊を、一八八三―一八八五年には第二次チベット探険隊を率いました。彼は何冊もの書物を著し、そのなかで探険に関する概要を学術的に述べ、現地の自然、気候、土地の起伏、動植物を詳細に生き生きと描きました。プルジェワリスキー自身は、謙遜して自身の旅行を「学術的予備調査」と呼びましたが、実のところ、彼が探訪したアジアの領域を、それまで学者が調査したことはなかったのです。ヨーロッパの人々に中央アジアを紹介し、アクセスが困難だとされた地域への関心を駆り立て、大規模で定期的な探険の開始に貢献したのは、プルジェワリスキーその人だったのです。

プルジェワリスキーは、何千キロという前人未踏の土地や何十もの山脈を图示した最初の人物であり、自らの時代を中央アジア旅行の「叙事詩的」時代と表現しました。最後の著作には、彼の学術的遺言と呼べるものが込められています。とりわけ彼が指摘したのは、中央アジアに関する今後の研究が次の二方向に向かうべきであるという点でした。それは、未踏とされている地域の实地踏査と、アクセスしやすい諸地域あるいは短期の旅行で表面的にしかならなかつた地域の徹底的な研究です。彼は、地理学と自然科学の観点で、チベット研究を最優先にしながら、東トルキスタンとくにチエルチェンのいくつかの地域で専門的な考古学調査を行う必要があると主張し、考古学に関するコメントを多く残しています。

生命の糧である貯水池の枯渇や猛烈な砂漠化の進行について旅行者に雄弁に証言するものは、かつて繁栄したオアシスや現在砂に埋もれてしまっている町の景色である。我々は中国の年代記からそ

これらの多くを知っており、自分たちでもそのいくつかを目にした。また、現地の人々が「昔その地域は、コータン、アクス、ロプノールに区切られ、二十三の町と三百六十の村があったが、今は消えてしまった」と語るのを現に耳にした。言い伝えでは、当時の人は「家々の屋根づたいに」クチャの町からロプノールへ行くことができたほど、タリム盆地は人口が密集していた。それが、今や砂漠である。今日でも、コータン、ケリヤ、ニヤ、その他現存するオアシスの住人は、毎年、秋と冬の間、嵐によって出現する古い居住跡を求めて、砂のなかへ足を踏み入れる。時にはそこで、金や銀の製品を見つけることがあるという。また、古い住居 (*sakhsa*) に遭遇し、そこで服やフェルト製品を見つけることもあるが、両方ともたいていかなり朽ちはたてていて、触れるや、ほこりになってしまう。<sup>(19)</sup>

一八七九年、植物学者のアーノルド・E・レーゲル

(二八五六―一九一七年) は、クルジャとトルファンを探訪しました。一八七六―七九年のトルキスタン地域への探険では、主に自然史の調査を目的として探険隊が組織されました。<sup>(20)</sup> しかし、レーゲルは報告のなかで「トルファン、サンジャ、マナスの近くにある、アーリヤ人のものであった可能性が高い古代遺跡の発見」<sup>(21)</sup> について詳しく述べています。彼は、古代イディクト・シャール遺跡を含む考古学的な遺跡の実測図をいくつか描き上げました。セルゲイ・F・オルデンブルク (一八五三―一九三四年) は、レーゲルを、東トルキスタンの古代遺物に着目した最初のロシア人と言っています。<sup>(22)</sup>

ミナーエフは、古代の東西文明が接触した地域としての広大な東トルキスタンの決定的な重要性に最初に気づいた人物です。彼は、タリム盆地南部への第二次探険について書いたブルジェワリスキーの報告を概観し、こう記しています。

一次資料の証拠によって、紀元五世紀以来、その地域では異国の文明が支配的であったことが明らか

かになった。人類史を編む今日の年代史家には、かつてそこにどのようなものが存在していたのか、まだ見えてこない。現存する古代の目撃証言は、極端に偏っているように思える。言ってみれば、意図的に一方的な見方をしているのである。巡礼仏教徒たちは、一側面のみを見たかのようだ。すなわち、インド文明が支配的であったことを何度も強調しておきながら、同時にそれが他の地方の諸文化——土着のものであれ流入したものであれ——と並存したであろう事実については、彼らは暗示することさえなかったのだ。<sup>(23)</sup>

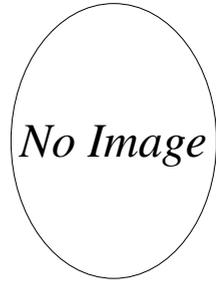
ミナーエフは、東トルキスタンへの確実な考古学的探険を開始する必要性について語った際に、「ロプノール湖とコータンの間の全地域が、歴史的・考古学的研究の重点的な対象となる<sup>(24)</sup>」と指摘しました。

#### ペフツォフの古代遺跡調査

ブルジェワリスキーの探究は、ミハイル・V・ペフ

ツォフ（一八四三—一九〇二年）、フセヴォロド・I・ロボフスキー（一八五六—一九二〇年）、グリゴリー・N・ポターニン（一八三五—一九二〇年）、ピョートル・K・コズロフ（一八六三—一九三五年）、グリゴリー・E・グルム・グルジマイロ（一八六〇—一九三六年）といった、彼の学生や随行者たちが引き継いでいきました。

ブルジェワリスキーの生涯に悲劇的な終止符を打った旅行——その計画に基づいて一八八九—一九〇〇年に敢行されたペフツォフのチベット探険では、「南トルキスタンの正確な地図を製作することにはじめて成功<sup>(25)</sup>」しました。さらにその成功によって、その地域の失われた文明の遺物に、多くの関心が集まりました。その探険隊には、ペフツォフの他、ロボフスキー、コズロフ、さらに地質学者であり鉱山技師でもあったカール・I・ボグダノーヴィッチ（一八六四—一九四七年）もいました。ブルジェワリスキーの死後、一八八八年十二月に探険隊の隊長に任命されたペフツォフは、きわめて周到に旅行の準備をしました。三カ月を費やして、その当時入手できた東トルキスタンの歴史に関する文献



ミハイル・V・ペフツォフ

をすべて勉強しました。たとえば、ピチュエーリン、カール・リッター、ワリハノフ、R・B・シヨール、T・D・フォーサイス、H・W・ベルー、クロパトキン、ブルジェワリスキー、グラブチエウスキ、N・L・ゼランド、ニコライ・F・ペトロフスキー（一八三七—一九〇八年）の著作です。さらに彼は、中国学者のブレットシユナイダーとワシーリエフに教えを請いました。ペフツォフは、こう記しています。

高名な中国学者E・V・ブレットシユナイダー博士から、私は多大な援助を受けた。私のために、一八六三年の中国の地図帳から、東トルキスタン、ジュンガリア、北西チベットの、二十六ヴェルス

タ（露里）を一インチにした地図を作製し、すべての地名をロシア語に訳してくれた。さらに彼は私に、『西域図誌』と呼ばれる最新の中国の地理学書から東トルキスタンに関する箇所を抜粋して提供してくれたうえに、その地域とチベットに関するヨーロッパの書籍と論文のリストを作ってくれた。（中略）北西チベットに関しては、中国学者ブレットシユナイダー博士とワシーリエフ氏が調べ上げたヨーロッパ諸語と中国語の資料のなかに、それについて言及したものはない。アカデミー会員のワシーリエフ氏がチベット語文献に基づいて編纂した手書きの地理調査資料があり、彼は早く私の使用を許可してくれた。しかしそこにも、当該国の北西部に関しては、非常に高い所にあり極限の気候を特色とするという一般的な説明を除いて、何の情報も見当たらなかった。<sup>(28)</sup>

ペフツォフは、探険の間、その地域の古代遺跡に関する情報を引き出そうと、現地の人々と話をしたよう

です。

私は、ヤルカンドでタクラマカン砂漠の遺跡について調査しようとしていた。十八年間その町の住民であったアクサカルのナスルージャン・ホジャ(Nasyr-Dzhan-Hojah)は私に語ってくれた。彼の知っている多くの現地住民の情報によれば、ヤルカンドから四十ヴェルスタ東の砂漠の果てに、コニョ・タタールと呼ばれる不規則に広がった遺跡がある、と。そこでは家屋の基礎部分がひとときわ目につく。かつて居住地を覆っていた大木群の切り株もある。地元の人々はその遺跡で、家庭用品や様々な道具の破片、ときに金貨や銀貨さえ見つけることがある<sup>(29)</sup>という。

ペフツォフは報告の中で、彼がコータン、チエルチェン、ウルムチの近くで発見した、いくつかの古代遺跡について述べています<sup>(30)</sup>。

#### その他の探險隊

ポターニンは、中央アジアとりわけモンゴルの研究に大いに寄与しました。彼は、一八七六―七七年及び一八七〇―八〇年にモンゴル北西部とトゥヴァへ、一八八四―八六年及び一八九二―九三年には中国北部、東チベットそしてモンゴル中央部へ、一八九九年には大興安嶺へ旅行しました。彼は、自然史研究と民族学研究を組み合わせました。その後、彼は出版物で、探險中に集積したモンゴルやテュルク系の人々の文化・民間伝承・大衆芸術や工芸に関する豊富な資料を概説することとなります。

辺地の遺跡に強い関心をもっていたグルム・ゲルジマイロは、一八八九年に東トルキスタン北部を探訪し、アサシャル遺跡について詳細に記述する一方で、多くの古代仏教史跡にも触れています<sup>(31)</sup>。ニコライ・F・カターノフ(一八六二―一九三三年)は一八九〇年に東トルキスタンを訪れ、テュルク系諸言語に関する資料をもたらしめました。一八九八―一九〇一年にはO・M・ノルズノフが、一八九九―一九〇二年にはG・T・ツイ

ピコフがチベットの探険隊を率いました。ツイビコフは、クムブムとラブランを探訪し、ラサに到達し、ウ  
ルガとキヤフタを経由してロシアに戻ります。彼が一  
大コレクションにしてまとめたチベット語文献の現物  
は、科学アカデミーのアジア博物館に収蔵されました。  
ツイビコフの旅行報告書が、一九一九年に出版されて  
います。<sup>(32)</sup>一八八九年、N・M・ヤドリントツェフは、モ  
ンゴル北部で複数のテュルク・ルーン文字碑文（突厥碑  
文）を発見しました。ルーン碑文の研究は、J・R・ア  
スペリンのフィンランド探険隊と、V・V・ラドロフ  
（二八三七―一九一八年）のオルホン遺跡探険隊（両探険と  
も一八九〇年）が行いました。

一八九三―一九五五年にロボロフスキーとコズロフが行  
った探険では、トルファン南方にあるリユクチュン（タ  
リム）低地の地形学的・気象学的調査が主要な目的とさ  
れました。探険隊は自然科学の一大コレクションに加  
え、多くの写本と美術品をトルファンからサンクトペ  
テルブルクにもたらしました。ロボロフスキーは、出  
版された探険資料集のはしがきで、報告書に次の情報

が含まれていないことを指摘しました。「古銭、仏像、  
古代の現地の言葉で書かれた文書サンプル、絵画、陶  
器、装飾品などについての情報である。それらは、探  
険隊がリユクチュン低地全域の古代の町々で集めたり、  
その土地の言語で書かれた書物から写したりしたもの  
である。一方、このセレクションには、リユクチュン  
低地で、すなわちイディクト・シヤーリの遺跡の町と  
トユク石窟で発見されたウイグル語の記録の断簡が収  
められている。これらが大いに関心を集めたため、帝  
国科学アカデミーは、D・A・クレメンツ（二八四八―  
一九一四年）を隊長とした特別探険隊をその地域に派遣  
した」<sup>(33)</sup>と。

#### 外交官ペトロフスキーの貢献

これらの地域の学術調査に大いに貢献したロシア人  
外交官として、カシユガル総領事ニコライ・F・ペト  
ロフスキー、彼の後継者であるセルゲイ・A・コロコ  
ロフ、カシユガル領事セルゲイ・V・ソコフ、ウルム  
チ領事のイワン・P・ラヴロフとニコライ・N・クロ

No Image

ニコライ・F・ペトロフスキー

トコフ（一八六九—一九一九年）、ウルムチ領事館書記官  
ヤコフ・Y・リュツチュ、クルジャ領事館書記官アレ  
クセイ・A・ディヤコフ、同領事ボリス・ウシリエヴィ  
ツチ及びウラジミール・V・ドルベージェフ、ウルム  
チ領事館の医官アレクサンドル・I・カハノフスキー  
が挙げられます。

一八六七年からトルキスタンで職務に就いていたペ  
トロフスキーは、写本や美術品を、現地住民から買い  
求めたり、考古学的発掘を行ったりして収集しました。  
S・F・オルデンブルクのいう通り、「N・F・ペトロ  
フスキーの素晴らしい発見が、東トルキスタン考古学  
研究の新たな時代を切り拓いた<sup>34</sup>」のです。さらにペト  
ロフスキーは、民族学的・民俗学的資料も収集しまし

た。ロシア考古学協会東洋部門は、一八九一年、カシ  
ユガルの古代遺物の件でペトロフスキーに話を持ちか  
けます。彼は返信とともに、写真二、三枚と、後にオ  
ルデンブルクが研究することになる「カシユガル写本」  
つまり梵文『法華経』(Saddharmapundarikasūtra)の断片  
を同封しました。その後、ペトロフスキーは、サンク  
トペテルブルクに新しい資料を定期的に送っていった  
のです。旅行家や学者は、彼に助言を求め、彼の助け  
によって常に恩恵を受けました。ペトロフスキーは現  
存するマザール〔聖者廟〕に仏教の遺物が隠されている  
ことに気づきました。また、彼が知る古代遺跡の位置  
をしるした東トルキスタンの詳細な地図も作りま  
した。

### 仏教研究の機運

中央アジア研究の成果がロシア社会で強い関心をか  
き立てたことは、明記されるべきでしょう。十九世紀  
後半と二十世紀前半、アジア世界、特に仏教に関する  
新しいモノグラフや東洋諸語による原典の翻訳版の公

刊を待ち望んでいたのは、学界だけではありません。

一般社会もそうでした。ポターニンがオルデンブルクに宛てた手紙が示すように、いわば仏教学文献が渴望されていたのです。一八九〇年十二月七日付の手紙で、ポターニンは、オルデンブルクに訪問してほしいと請いながら、こう書いています。

私は、V・V・レセヴィッチも招待しました。彼もまた、観音菩薩に関心をもっています。あなたが私に貸してくださったそれら（「の諸文献」）に心を奪われています。私が驚いたのは、私がモンゴルで記録したアーユ菩薩 (Ayu-Bodhisattva) 伝説の抜粋にそれらが似ているように思えたことです。

一八九八年四月三十日付の手紙では、彼は知り合いの女性のために、「どの初級サンスクリット語の手引きを彼女は購入すべきか」助言を求めています。一九〇〇年十月二十日の手紙では、他の諸用件とともに、このように綴っています。

パンテレレイエワさんが、ブツダに関する公開講演を企画しており、釈尊の生涯から絵をいくつか指定してほしいとの依頼が入っています。幻灯を用いて、それらをスクリーンに投影できるように彼女はしたいようです。（中略）その講演が公表されれば、同じような講義をイルクーツク地方やトランスバイカリア地域のシベリアの町でも開催できるでしょう。それが、現地の人々に宗教的寛容性を教えていくのに資することとなります<sup>(35)</sup>。

#### ロシア地理学協会の活動

一八九六年、ロシア地理学協会は、ロボロフスキー探険隊がトルファン・オアシスの各地で見つけたか、あるいは購入した諸文書の断片の入った袋を受け取り、サンクトペテルブルクへ送りました。ロシア地理学協会書記のアレクサンドル・V・グリゴリエフは、断片に対する専門家の評価を得ようと、オルデンブルクに打診しました。オルデンブルクとA・O・イワノフス

キーは、袋の中身を仕分けていき、中国語、ウイグル語、サンスクリット、ウイグル語サンスクリット並記の写本断片を特定しました。それらの資料を引き渡されたラドロフは、資料を一つの論文にまとめ、科学アカデミーへ提出しました。歴史学・文献学部門は、特別委員を任命し、この考古学的コレクションを調査させました。その委員会のメンバーとして、ラドロフ、A・A・クーニク、ワシーリエフ、C・G・ザーレマン、V・P・ローゼンが、また招聘専門家として、クレメンツとオルデンブルクが活動しました。

委員会は一八九八年に、トユク・マザールとイディクト・シャリーの遺跡を特別に調査するために、クレメンツをトルファン探険に派遣すべきであると提案しました。その旅行計画に際して、委員会は、ロポロフスキー探険隊のメンバーから顧問を探しました。クレメンツは、一八九八年三月四（十七）日付のコズロフ宛のはがきにこう記しています。

貴探険隊によるトルファン地域での発見が、強い

関心を集めたことを鑑みて、科学アカデミーは、トルファンへの探険隊を組織するための特別委員会を設置しました。そこで、アカデミー会員であるラドロフ氏から、貴殿に（アジア）博物館で話していただきたいとの依頼がありました。貴殿がご覧になってきた遺跡の位置について、何らかの情報を共有させていただければと思います。<sup>(36)</sup>

探険の期間は、四カ月と認められました。<sup>(37)</sup>探険には、クレメンツ自身だけでなく、彼の妻エリザヴェータと民族学者のミハイル・S・アンドレイエフ（二八七三一―一九四八年）も同行しました。クレメンツは、トルファンでの時間的制約と財源不足のために、発掘調査を実施できませんでしたが、遺跡を描写し、それを写真に収め、図面を作り、トレース画や拓本をとることができました。探険による学術的発見は大評判となり、その成果はクレメンツの詳細な記録に示され、<sup>(38)</sup>概要の報告が公表されました。<sup>(39)</sup>

一九〇〇年一月二十七日（二月九日）、ニコライ・I・

ヴェセロフスキー（二八四八一—一九一八年）、クレメンツ、オルデンブルクは、ロシア考古学協会東洋部門に検討してもらうために「タリム盆地への考古学的探険隊組織のための覚書」を提出しました。彼らは、東トルキスタンへの探険隊の定期派遣を議案に出しました。具体的には、継続して活動するには二つの探険隊を組織すべきであると提案しています。すなわち、第一にトルファンとクチャ地方への探険隊を、第二にロプノール湖、チエルチェン、ケリア・オアシス付近一帯を含む、トルファンとコータンの間の広大な領域への探険隊を提案したのです。<sup>(40)</sup>

その「覚書」で示したところによれば、「タリム盆地の研究、いえ、そもそも学術調査対象としての同地の発見自体がロシア探険隊員の功績であることは疑いありません。フォーサイス、セチューニ伯、フランシス・ヤングハズバンド、デュトルイユ・ド・ラン率いる探険隊の調査結果は他の追隨を許さぬほどでしたが、〔わが国の〕レーゲル、ブルジェワリスキー、彼の仲間、ゲルム・グルジマイロ兄弟、ペフツォフ、ボグダノーヴィ

ッチ、オブルチェフ、ペトロフスキー、科学アカデミーの新しい探険隊による全活動は、それら外国の学者によってなされたものをはるかに凌いでいます。<sup>(41)</sup> その地域の経済的・商業的發展、とくに農業の普及により、覚書に記述されたような「古い遺構の容赦ない破壊——しっくい肥料に使われ、レンガ造りの建造物は彼らの住居建設に使うために壊される」事態がおそろしく起きました。

前述の通り、覚書では、継続して活動できる二組の探険隊を組織することが提案されました。第一にトルファンとクチャ地方の踏査のためであり、第二にロプノール湖、チエルチェン、ケリア・オアシス付近一帯を含む、トルファンとコータンの間の広大な領域の踏査のためでした。いずれの探険隊も、芸術家一人を必ず含めた五人組にすべきとされました。第一の探険には八カ月から十カ月を要し、第二の探険には十二月から十五カ月を要するとしました。さらに、最初の探険には、一万七千ルーブルが見積もられました。<sup>(43)</sup> 一九〇〇年一月二十七日、ロシア考古学協会東洋部門の会

## 二十世紀…増大する資料の収蔵と研究

### R C M A の創設

合で、この覚書について検討されることになりました。ですが、財務大臣は彼らの資金援助の依頼を拒否しました。<sup>(44)</sup>そのためトルファン探険プロジェクトは、九年間実施されることはなかったのです。

一八九九年、アカデミー会員のラドロフとオルデンブルクは、ローマで開催された第十二回国際東洋学者会議で、クレメンツの探険隊がトルファンで発見した、古ウイグル語やテュルク・ルーン文字の碑文や美術品に関して発表しました。この会議を受けて、一八九九年十月二(十四)日に、前述の諸地方の地理学的、民族的、考古学的調査を任務とした、中央・東アジア研究国際協会が創設されました。協会の設立趣意書は、一九〇二年九月八(二十一)日、ハンブルクで開かれた第十三回国際東洋学者会議で承認されました。同様の目的で多くの国々に設置された委員会は、ヨーロッパ人による東トルキスタンの調査領域を分割することに合意しました。それにもかかわらず、この会議の直後に組織されたA・グリユンヴェーデルの探険隊が、その合意を破ったのです。

中部・東アジア研究ロシア委員会(R C M A)が一九〇三年に創設され、同年二月二(十五)日に皇帝からその設立趣意書の承認を得ます。R C M Aの委員長にラドロフが、副委員長にオルデンブルクが就任しました。その理事会は、V・A・ジュコーフスキー、ワシリー・V・バルトリド、レフ・Y・シュテルンベルグで構成されました。外務省管轄下のこの委員会には、調査中の地域に代表団を派遣し、探険隊を発足させ、ロシア語とフランス語で会報を発行する権利がありました。R C M Aの任務は、「探険対象の諸国・諸地域に現存する遺跡の研究を、物質・精神の両側面から、あらゆる可能な方法で促進すること」<sup>(45)</sup>でした。

当局は、新設されたR C M Aに対し、当初かなり好意的でした。一九〇四年一月十六(二十九)日、ニコライ二世は、「今年度中に、東トルキスタンにおける考古学探険の資金として、一万二千ルーブルを(委員会に)

割り当てる」ように命じ、(一九〇五年以降)四年間「同じ事業に対して」年度ごとに七千ルーブルを割り当てる権利を外務省に付与しました。<sup>(46)</sup>しかしながら、翌年、「前述の資金の割当は、深刻な財政難のために保留とされ」、<sup>(47)</sup>一九〇八年三月に下院の予算委員会は、中部・東アジア研究ロシア委員会については科学アカデミーの管轄にすべきであると提案しました。

中部・東アジア研究ロシア委員会が直面する難題の解決には政府の実質的な支援が必要だったため、その提案は却下されました。一九〇八年三月十八(三十一)日、RCMAの設立趣意書を起草するための準備特別委員会が招集され、RCMAは引き続き外務省の管轄とすることが満場一致で票決されました。この決定に対する理由として、次の内容が下院へ送られました。

で保証される。

二 委員会の学術調査対象となる地域の大部分は、ロシア帝国の国境を越えているため、委員会は諸外国のロシア大使館並びに領事館と直接連絡できる関係を維持していく必要がある。

三 ロシア領域における外国人の学術活動、またアジア諸国領域におけるロシア人学者の学術活動の許可について、ロシア委員会は専門家による検討結果を外務省に提出することになっている。これには、外務省との迅速かつ密接な連携を要する。理事会の理事は、外務省の全幅の信頼を得なければならないが、この点は彼らの任命が外務大臣によって承認されるところという現行の取り決めによって保証される。

四 ロシア委員会が、国際協会の中心組織として、その学術的・国際的信用を維持していくのであれば、他の学術団体から完全に独立してなければならない。<sup>(48)</sup>

一 中央・東アジア研究国際協会を主導する機関であるロシア委員会(RCMA)は、必要に応じて外国政府と接触できることになっており、その点は委員会が外務省の管轄下にあること

RCMAが何度も外務省に報告してきたように、財政上の諸問題が探險活動の妨げとなってきました。大臣宛ての手紙にはこうあります。

(資金削減が) 委員会〔RCMA〕の東トルキスタンのプロジェクトに悪影響を及ぼしています。まずプロジェクトの進捗が著しく遅れ、それから完全に中断してしまふという状況です。ドイツやフランスといった他国の人間は、この機に乗じて早々に恩恵を被っています。彼らは、我々の〔探險隊の〕足跡をたどって大規模な探險隊を送っているのです。委員会が積極的に遅滞なく活動を再開しなければ、東トルキスタンにおけるロシア人学者たちの長年の研究は、おそらく完全に無駄になってしまふでしょう。<sup>49)</sup>

#### 帝室による財政支援

この時期、RCMAは、中央アジアへの小規模な探險をようやく負担できるだけという状況でした。一九

〇三年に、アンドレイ・D・ルードネフ（一八七八—九五八年）が、モンゴル語方言の研究のためモンゴル東部へ派遣されました。一九〇五—〇七年、ミハイル・M・ベレゾフスキーの探險隊がクチャに赴きました。彼の探險隊には、彼の親類で製図工であり、土木工学の学生でもあったニコライ・M・ベレゾフスキーが含まれていました。

ミハイル・M・ベレゾフスキーは、スバシ、ドウル・ドウル・アクル、タジット、クムトラ、クチャ、キジル、キリシユを訪れました。彼は、壁画の水彩模写やトレースングを行い、多くの実測図を描き、大量の写真を撮りました。後に、オルデンブルクは彼の活動をこう描写します。「才気あふれる写真家。優秀な地図製作者。訓練はまだまだ。スローベス」<sup>50)</sup>と。

一九〇五—〇七年、RCMAはバドザール・B・バラディンのラブランへの旅行の準備と編成に積極的に加わりました。その旅行は価値ある研究材料をいくつかもたらし、「綿密にかつ見事に選択されたアムド開版のチベット語木版印刷物」<sup>51)</sup>により科学アカデミーのチ

## No Image

ゴビ砂漠にそびえるカラホト（黒水城）遺跡の城壁と仏塔。11世紀から西夏王国の主要都市として栄え、城壁は高さが9メートル以上あった。コズロフの探険隊がここで収集した数千点におよぶ絵画や古文書は、サントペテルブルクのエルミタージュ美術館などへ送られた

ベツト語文書のコレクションが充実していきました。

R C M A は、中央アジアへ大規模な考古学探険隊を送り出すため、長い間苦勞して資金を獲得してきましたが、その地域の地理的・自然科学的調査は、ロシア地理学協会が引き続き行うことになりました。一九〇六―〇七年、カール・G・マンネルハイム（二八六七一―九五一年）は、勅命により「内密に」中国へ派遣されました。彼は、長い時間をかけて、特にカシユガルとトルファン地域の古代遺跡を調査し、記録し、撮影し、いくつかの遺跡の実測図を描きました。<sup>(52)</sup> コズロフが率いた探険では、一九〇七―〇九年に、ゴビ砂漠のカラホトで、タンゲート族の死せる町の遺跡が発見され、タンゲート美術固有の遺物や文書がサントペテルブルクへ送られるという、きわめて効率のよい結果をもたらしました。

一九〇八年、R C M A は、帝室がその活動に注目してくれるように、大ツァールスコセルスキー宮殿で、皇帝ニコライ二世とえり抜きの客を対象に「東トルキスタンとサマルカンドの古代遺物展」を開催しようと、

No Image

セルゲイ・F・オルデンブルク

宮内大臣に連絡をとりました。展示物には、ベレゾフスキーのクチャ探検とサムイル・M・ドゥーディン（一八六三―一九二九年）の西トルキスタン探検で発見された品々が含まれていました。展覧会は、一九〇八年十一月三十日（十二月十三日）の午前十一時から午後四時まで一日だけ開催されました。招待客のなかには、ラドロフ、オルデンブルク、ベレゾフスキー、ドゥーディンもいました。皇帝は展覧会を巡り終えると、「ロシア委員会に対する特別支援に快く同意」<sup>(53)</sup>しました。

### オルデンブルクの考古学的手法

展覧会のおかげで、RCMAは、トルキスタンへの探検隊を組織するための政府助成金を獲得しました。

探検隊は、オルデンブルクが率いました。彼が行ったトルファンへの旅行（一九〇九―一〇年）と敦煌への旅行（一九一四―一五年）は、ロシア・トルキスタン探検と称されました。

これまでの諸探検に関する資料が公開されていなかったため、オルデンブルクは、一九〇九―一〇年のトルファン探検を予備調査として実施しようと考えていました。実際には、それまでの探検隊の活動の足跡を知ったとき、彼は深く失望することになります。この件について、T・I・シチエルバツキー（一八六六―一九四二年）はこう言っています。

結果として、S・F（オルデンブルク）率いる探検隊が発見した時、その地域は他の多くの探検隊がすでに探訪しており、考古学的に言えば、文字通り略奪されてしまっていた。彼らの跡を追うかたちで到着したロシア探検隊は、「到着したという」事実を作っただけで、事実上、手ぶらで帰国することになった。その間に、ベルリンでは中国領トル

キスタンでの発見物を展示する壮大で豪華な博物館が開館した。そこは市の見どころの一つになり、学者や海外からの観光客であふれ返っている。<sup>(54)</sup>

オルデンブルクの第一次ロシア・トルキスタン探険隊は、主に東トルキスタン北部のオアシス、すなわちカラシャール、トルファン、クチャで重点的に活動しました。それらの地域では、およそ十二の仏教寺院・石窟寺院が調査されました。オルデンブルクの考古学的研究手法は、主に、正確に撮影された鮮明な写真と精緻に描かれた実測図に依拠するものでした。そのために彼は、一流の美術写真家と地形技師をわざわざ雇っていたのです。芸術家で写真家のドゥーディンと、鉱山技師のドミトリー・A・スミルノフは、オルデンブルクの最初の探険隊の隊員でした。第一次ロシア・トルキスタン探険については、短報だけが出版されました。<sup>(55)</sup>オルデンブルクが探険の間に収集した資料は、現在、ロシア科学アカデミーの東洋古文書研究所、国立エルミタージュ美術館、ロシア民族学博物館に収蔵

されています。国立エルミタージュ美術館、科学アカデミー図書館のサンクトペテルブルク支部、東洋古文書研究所内の東洋学者アーカイブに保管されているロシア・トルキスタン探険の膨大な保存記録は、とりわけ注目に値します。

#### 内戦中に初の「仏教展覧会」

一九〇九―一一年と一九一三―一四年、セルゲイ・E・マールロフ（一八八〇―一九五七年）は、現地のテュルク系民族、すなわちウイグル族、黄頭ウイグル族、ロプノール住人、サラール族の言語と日常生活を研究するために、東トルキスタンと中国中央部へ旅行しました。これにより、それらの言語がはじめて学術的に概説されました。他にはないウイグル語の『金光明経』(Alun Yang) 写本を発見したことが、マールロフの最初の探険の主要な業績となりました。

仏教美術品は、ペトログラードで開催された第一回仏教展覧会で披露されました。それは、内戦最中の一九一九年八月二十四日にロシア博物館の教部屋でオ

ブンしました。インドや中央アジアから将来された品々を陳列することで、仏教美術様式の多様性をロシアの人々に紹介することが展覧会の目的でした。展示品には、敦煌石窟の壁画のトレース画と写真、カラホトのタングート族の町から出土した彫像や絵画とともに、インド、チベット、モンゴル、日本、ジャワ、インドシナから将来した仏教の装飾美術品も含まれていました。展示は、表現されたブツダ像とそれをめぐる多様な文化による解釈が中心テーマでした。保存状態がよく、修復の必要のない仏教美術遺品数点だけが出展され、壁画（の模写）や写本、民族学的収集品は展示されませんでした。展覧会に併せて、最も著名な学者による、仏教の歴史と現状に関する公開講演が毎週行われました。たとえば、オルデンブルクによる「ブツダ」、シチエルバツキーによる「ブツダの教えと信徒共同体」、B・Y・ウラジミルツォフによる「チベットとモンゴルにおける仏教」、O・O・ローゼンベルグによる「日本における仏教的世界観」<sup>(56)</sup>です。

## ソビエト時代

中央アジアの研究は、ソビエト時代に再開されました。一九二二―二六年、コズロフ率いるモンゴル・チベット探險隊は、ノイン・ウラ古墳群の発掘に成功しました。ウラジミール・A・オブルチェフ（二八六三―一九五六年）は、シベリアと中央・中部アジアの地理学と地質学の研究に大いに貢献しました。彼は、たくさんの大衆向け科学書や読者を惹きつけるSF小説の中で自身の体験を書き表していきました。

ロシア人学者は、中央・中部アジアの広域において、大規模調査を通じて学术界に最も意義ある貢献をしてきたのであり、それは今なお有効です。ロシア探險隊によって学術資料が大きく増加し、歴史学、考古学、言語学といった幅広い分野に対して新たな参照材料が提供されたのです。

〔 〕は邦訳に際しての補注

注

- (1) [N.Ya. Bichurin] Iakinf. *Statisticheskoye opisanie Kitayskoy imperii*. Vol. 1. St. Petersburg, 1842, pp. III-IV. [『中華帝国の統計学的概要』(五頁の地図付)]
- (2) N.A. Polevoy. *Sovremennaya bibliografiya*. In: *Moskovskiy telegraf*. Issue 25. Moscow, 1829. Supplement to No. 4, pp. 532-543. [『現代書籍解題』「ポストロ・ネレンツマン」一五巻、四号の追補]
- (3) [N.Ya. Bichurin] Iakinf. *Sobranie svedeniy o narodakh obitavshikh v Sredney Azii v drevniye vremena*. 3 vols. St. Petersburg, 1851. [『古代中央アジアに暮らす諸国民に関する資料集成』]
- (4) Quoted from: M.F. Matveyeva. *Issledovaniye Tsentralnoy Azii – odna iz samykh yarkikh stranits v istorii Russkogo geograficheskogo obshchestva*. In: *Sankt-Peterburg – Kitay: tri veka kontaktov*. St. Petersburg, 2006, p.128. [『中央アジア調査：ロシア地理学協会史上もつとの特筆すべきページ』「サンクトペテルブルク―中国：関係の三世系』]
- (5) Z.I. Gorbacheva, N.A. Petrov, G.F. Smykalov and B.I. Pankratov. *Russkiy kitayeved akademik Vasily Pavlovich Vasilyev (1818-1900)*. In: *Ocherki po istorii russkogo vostokovedeniya*. Moscow, 1956, p. 296. [『ロシア人中国学者・アカデミー会員 V・P・ワシーリエフ(一八一八―一九〇〇)』「ロシア東洋学史論集』]
- (6) V.P. Vasilyev. *Tsentralnaya Azia i glavniye khebty gor v kitayskikh vladeniya*. In: *Zhurnal Ministerstva Narodnogo Prosvesheniya*. Vol. 73, section 3, 1852, p. 127. [『中央アジアと中国領土の主要山脈』「人民教育省ジャーナル』]
- (7) Petersburg Branch of the Archives of the Russian Academy of Sciences (PBA RAN). F. 775, inventory 1, units 91, 147 and 150.
- (8) PBA RAN. F. 775, inventory 1, unit 8.
- (9) I.P. Minayev. *Svedeniya o stranakh po verkhovnyam Amu-Daryi (po 1878 god)*. In: *Izvestiya Imperatorskogo Geograficheskogo Obshchestva*, 1879. I.P. [『アムダリア上流域諸国に関する資料(一八七八年まで)』「帝立ロシア地理学協会会報』]
- (10) I.P. Minayev. *Puteshestviye Marko Polo*. *Translated from the Old French*. St. Petersburg, 1902. [『マルコ・ポーロの旅日記』]
- (11) Ch. Ch. Valikhanov. *Sobranie sochineniy*. Vol. 2. Alma-Ata, 1962, pp. 105-144, 145-164. [『著作集』]
- (12) Ch. Ch. Valikhanov. *O Zapadnom kraye Kitayskoy imperii*. In: *Sobranie sochineniy*. Vol. 2. Alma-Ata, 1962, p. 112. [『中華帝国の西域』「著作集』]
- (13) [C.] Ritter. *Zemlevedeniye. Istorichnyi ili Kitayskiy Turkestan* [Translated by V.V. Grigoryev, with critical commentaries and added information from the sources published over the past thirty-five years]. Part 1. St. Petersburg, 1869. p art 2.

- St. Petersburg, 1873. 『地理学：東（中国領）トルキスタン』
- (14) E. Breitschneider. *Notices of the Medieval Geography and History of Central and Western Asia*. SPb. 1876; E. Breitschneider *Medieval Researches from Eastern Asiatic Sources. Fragments towards the Knowledge of the Geography and History of Central and Western Asia from the 1<sup>st</sup> to the 17<sup>th</sup> Century*. 2 vols. SPb, 1888.
- (15) [A.N. Kurpakin]. *Ocherki Kashgari generalnogo shtaba podpolkovnika A. Kurpalkina* [Essays on Kashgaria by Lieutenant Colonel A.N. St. Petersburg, 1878. 『カシメガハ論集』]
- (16) Ochet o poyezdke v Kashgar i yuzhnyu Kashgariyu v 1885 godu starshiego chimovnika osobnykh porucheniy pri voyennom gubernatore Ferganskoy oblasti poruchika B.L. Grombehevsky (Grombehevsky). Not for publication. Classified. Fergana, sa. 『フェルガーナ地方軍政の特別高官・クラブチエウスキ中尉の一八八五年カシメガハ及び南部カシメガリア旅行報告』未発表、極秘文書、フェルガーナ、日付の記載なし』
- (17) N.L. Luznetskaya. *Materialy k istorii razgranicheniya na Pamyre v Arkhive volokovedov SPbF IV RAN (fond A.Ye. Snesareva)*: *Ochet Generalnogo Shtaba kapitana Iannovskogo po rekognostirovke v Rushtane (1893)*. 2005. No. 2 (3), p. 135. 『ロシア科学アカデミー東洋学研究所
- (18) N.M. Przhnevskiy. *Chevertoye puteshestviye v Tsentralnyu Aziyu. Oi Kyakhy na istoki Zhetloy reki. Issledovaniye Severnoy okrainy Tbeta i puti' cherez Lop Nor po basseynu Tarima*. St. Petersburg, 1888, p. 64. 『第四次中央アジア旅行 キヤフタから黄河源流へ チベット北部境界の調査』タリム盆地に沿ったロプノール旅行』
- (19) *Ibid.*, p. 356.
- (20) A. Regel. *Reisen in Central-Asien, 1876-1879*. Mit. Bd. 25. Pet., 1879; Mit. Bd. 26. Pet., 1880; A. Regel. *Meine Expedition nach Turfan*, 1879. Mit. Bd. 27. Pet., 1881.
- (21) A. E. Regel. *Puteshestviye v Turfan. Chitano v Ordeleonii matematcheskoy i fizicheskoy geografii Imp. RGO 10 marta 1881 g. Izvestiya IRGO za 1881 g. 1881. Vol. 17. Issue 4, p.16. 『トルファン旅行：一八八一年三月十日帝立ロシア地理学協会、数理・自然地理学部門における発表』『帝立ロシア地理学協会会報』（印刷）』*
- (22) S.F. Oldenburg. *Russkiye arkhеologicheskiye issledovaniya v Vostochnom Turkeстане*. In: *Kazansky muzeyniy vestnik*. 1921. No. 1-2, p. 25. 『ロシアの東トルキスタン考古学的調査』『カザン博物館紀要』]
- (23) I.P. Minayev. *Zabytyi put' v Kitay*. Review on N.M.

- Przhevalsky's *The Fourth Journey to Central Asia. From Kyakha to the Source of the Yellow River. Investigation of the Northern Outskirts of Tibet and the Trip across Lop Nor along the Tarim Basin*. St. Petersburg, 1888. In: *Zhurnal Ministerstva Narodnogo Prosveshcheniya*(ZMNP). Part 264. 1889. No. 7. Section 2, p. 177. 「中国への忘れ去られた道：N・M・プルジュエリスキー著『第四次中央アジア旅行 キヤフタから黄河源流へ チベット北部辺境の調査及びタリム盆地に沿ったロプノール旅行』(サントペテルブルク、一八八八年)の書評」『人民教育省ジャーナル』
- (24) *Ibid.*, p. 189.
- (25) S.F. Oldenburg. Issledovaniye pamyatnikov starinykh kultur Kitaiskogo Turkestana. In: *ZMNP*. Part 353. 1904. No. 6. Section 2, p. 384. 「中国領トルキスタンにおける古代文化の遺跡に関する研究」『人民教育省ジャーナル』
- (26) [N. Zeland]. Kashgaria i perevaly Tian-shanya. Putevye zapiski N. Zelanda. In: *Zapiski zapadno-sibirskogo otdela Imperatorskogo Russkogo Geograficheskogo Obshchestva*. Part. 9. Omsk, 1887. 「カシユガリアと天山山脈の道：N・ゼランダの旅行記」『帝立ロシア地理学協会西シベリア部門会報』
- (27) これは一八四〇年代に翻訳されたが、一八九五年まで出版されなかった。V.P. Vasilyev. *Geografiya Tibeta*. St.Petersburg, 1895. 「Minchal Khutuku によるチベット語著作『チベットの地理学』からの翻訳」
- (28) M.V. Pevsov. *Puteshestviye po Vostochnomu Turkestanu, Kun-Luntu, severnoy okraine Tibetskogo Nagorya i Dzhungarii v 1889 i 1890 gg.* St. Petersburg, 1895, pp. 10-11. 「一八八九年と一八九〇年における東トルキスタン、崑崙、チベット高原北端、シユンガリアへの旅行」
- (29) *Ibid.*, p. 88.
- (30) *Ibid.*, pp. 106-107, 120-121, 225, 255, 326-337.
- (31) G.G. Grumm-Grzhimaylo. *Vdol' yuzhnogo Tian-Shanya*. Vol. 1. St. Petersburg, 1896? pp. 273, 294-296, 323. 「天山山脈南麓に沿って」
- (32) G.Ts. Tsybikov. *Buddist-palomnik u svyatyn' Tibeta. Po dnevnikam, vedennym v 1899-1902 gg.*. Petrograd, 1919. 「仏教徒のチベット聖地巡礼 一八九九—一九〇二年作成の記録」
- (33) *Trudy ekspeditsii Imperatorskogo Russkogo Geograficheskogo obshchestva po Tsentralnoy Azii. Part 1. Ocheri nachalnika ekspeditsii V.I. Roberovskogo*. St. Petersburg, 1900, p. 6. 「帝立ロシア地理学協会の探険隊による中央アジアの記録 一部：ロボロフスキー探険隊の報告」
- (34) S.F. Oldenburg. Issledovaniye pamyatnikov starinykh kultur Kitaiskogo Turkestana. In: *ZMNP*. Part 353. 1904. No. 6. Section 2, p. 373. 「中国領トルキスタンにおける古代文化の遺跡に関する研究」『人民教育省ジャーナ

- ル」]
- (35) PBA RAS, F. 208, inventory 3, unit 480, ff. 1, 4, 5-5 v.
- (36) Quoted from: N. A. Petrov. Nauchnye svyazi mezhdu vostokovedeniyami i puteshestvennikami-geografami v kontse XIX i nachale XX. In: *Srany i narody Tostoka*. Issue 1. Moscow, 1959, p. 260. [(引用)「十九世紀後半から二十世紀前半における東洋学者と旅行家・地理学者との学術交流」『東方における国と人』]
- (37) S.F. Oldenburg. Ekspeditsiya D. A. Klementza v Turfan v 1898 godu. (printed impression from vol. 45 of *Izvestiya Vostochno-Sibirskogo otdela Imperatorskogo Russkogo Geograficheskogo obshchestva*. Irkutsk, 1917, pp. 1-2. 「一八九八年のクレメンツのトルファン探検」『帝立ロシア地理学協会東シベリア部門会報』]
- (38) AO IOM RAS, F. 28, inventory 1, units 121-137. 「ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所東洋学古文書室」]
- (39) *Nachrichten über die von der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften zu S. Petersburg im Jahre 1898 ausgesandte Expedition nach Turfan*. H. 1. St. Peterburg, 1899.
- (40) N.I. Veselovsky, D. A. Klementz, S.F. Oldenburg. Zapiska o snaryazhenii ekspeditsii s arheologicheskoy iselyu v basseyn Tarima. In: *Zapiski Vostochnogo Otdeleniya (Imp.) Russkogo Arheologicheskogo Obshchestva*. Vol. 13 (1900). Issue 1. St. Petersburg, 1901, p. XVII. 「考古学的目的によるタリム盆地への探険隊を組織するための覚書」『帝
- 立ロシア考古学協会東洋考古学部門会報』 XIII 卷 (一九〇一年) ]
- (41) *Ibid.*, p. XI. 同
- (42) *Ibid.*, p. XI.
- (43) *Ibid.*, p. XVII.
- (44) Cf.: *Dokladnaya zapiska ministra finansov S.Yu. Witte Nikolayu Voromy o nevozmozhnosti finansirovaniya arheologicheskoy ekspeditsii v Vostochny Turkestan ot 20 Iyunya 1900 g.* (PBA RAS, F. 148, inventory 1, unit 4). [(参照)「東エルキスタン考古学探険隊を支援する不可能性についての財務大臣の・ユ・ウイッチナからニコライ二世への特別報告 (一九〇〇年六月二十日)』]
- (45) S.F. Oldenburg. Russkiy komitet dlia izucheniya Sredney i Vostochnoy Azii. In: // *ZMNP*, 1903, Part 349, No. 9, Section IV, p. 45. 「ロシア中部・東アジア踏査委員会」『人民教育省シギヤール』]
- (46) PBA RAS, F. 148, inventory 1, unit 49, f. 46.
- (47) PBA RAS, F. 148, inventory 1, unit 49, f. 51.
- (48) PBA RAS, F. 148, inventory 1, unit 49, ff. 27-27 v.
- (49) PBA RAS, F. 148, inventory 1, unit 49, ff. 51-51 v.
- (50) PBA RAS, F. 208, inventory 1, unit 188, f. 37.
- (51) A.I. Vostrikov. S.F. Oldenburg i izucheniye Tbeta // *Zapiski Instituta vostokovedeniya AN SSSR*. Issue 4. Moscow-Leningrad, 1935, p. 76. 「の・丘・オルテンブルクとチベット研究」『ソ連科学アカデミー東洋学研究所記録』]

- (52) *Istochnyi Tukestan v drevnosti i rannem srednevekovye. Ocherki istorii*. Ed. by S.L. Tikhvinsky and B.A. Litvinsky. Moscow, 1988, p. 37. 『古代と中世初期の東トルキスタン：史学論集』
- (53) PBA RAS, F. 148, inventory 1, unit 49, ff. 103-107.
- (54) F.I. Stecherbatsky, S.F. Oldenburg kak indianist. In: *Zapiski Instituta vostokovedeniya AN SSSR*. Issue 4. Moscow-Leningrad, 1935, p. 26. 『インド学者としてのS・F・オルデンブルク』『ソ連科学アカデミー東洋学研究所記録』
- (55) S.F. Oldenburg. *Russkaya Turkestanskaya ekspeditsiya 1909 goda. Kratkiy predvaritelnyi ochet*. St. Petersburg, 1914. 『一九〇九年ロシア・東トルキスタン探険：短報』
- (56) PBA RAS, F. 208, inventory 1, unit 233, f. 1a.

**Irina Fedorovna Popova** / ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所所長。サンクトペテルブルク国立総合大学東洋学部准教授。ロシア科学アカデミー東洋学研究所レニングラード（現サンクトペテルブルク）支部博士課程修了後、同研究員、学術担当主事を歴任。博士（歴史）。中世中国とくに唐代の政治思想や行政システムを主な研究テーマとし、東洋学研究所サンクトペテルブルク支部が所蔵する中国の拓本や敦煌コレクションの目録作成も担う。